

与那国島に存する組踊写本の考察

當間, 一郎 / TOUMA, Ichiro

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

199

(終了ページ / End Page)

242

(発行年 / Year)

1978-06-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002626>

与那国島に存する組踊写本の考察

一 はじめに（組踊写本の現状）

当間 一郎

伊波普猷氏がまとめて出された『校注琉球戯曲集』（昭和四年 春陽堂）は、一八三八年の「戊の御冠船」で上演された台本（羽地御殿本）が底本となっている由緒ある著書であり、今日出版されて使用されている戯曲集の中で、もっとも信頼できる台詞がおさめられており、権威ある資料集といえよう。

現在では『羽地御殿本組躍集』といわれる写本は、いわゆるまぼろしの写本と化しており、今次大戦で羽地村（現名護市）内までは他の図書資料と一緒に運ばれたことがわかっているが、それからの足どりが杳^{ちやう}としてわからないのである。おそらく爆風にあい、あるいは風雨や火事等できえてしまつたにちがいないと思われる。今一つは、『戯曲集』の中で、異本の一つとして使われたであろう、一

八六八年の「寅の御冠船」時の台本『小禄御殿本組踊集』のゆくえである。これも前者と同じく、県立図書館所蔵本であったので、他の資料と行動は一つで、永久に日の目を見ることができなくなった、惜まれる写本である。

伊波氏が『戯曲集』を出した時点で、この写本の活字化も考えられて、資料の分散を考えて下さっていたら、組踊研究の深化に大きな貢献をしたのではなからうかと、残念でならない。せっかく保管されていた貴重な由緒ある写本が、消え失せてしまうことがあるのだから、今後は資料の分散をまず第一に考えていかなければと、このごろ痛切に思うところがあって、その仕事をはじめているのである。組踊は、一七一九年の第一回目の上演以来、数回にわたって御冠船踊のハイライトとして舞台にかかっているのだから、そのうちのいずれかが残っていてもいいものだが、現在のところ、それらしいものは出ていないのである。三十三年前のあの大战で、多くの県民の生命とともに、貴重な諸資料が消え失せるという悲しい結果になってしまったのである。

しかし、すべての写本が灰燼にきしたわけではない。本土の大学図書館や研究家の書庫にあって難をのがれたものや、沖縄本島北部の村落やその周辺離島をはじめ、宮古や八重山の、比較的戦火をのがれたところに、大切に保管されて、今日まで生命を保っているのも少なくはない。写本等を含めた諸資料の分散保存は、これらの残されているものからみても、ぜひ考えるべきことであろう。

ただ、現存する写本は、いくつも同じものが筆写されて分散されたものではなく、明治の二十年代から三十年代にかけて、誰かの手によって筆写された台本が、家宝として、あるいは貴重な文献として、ただひたすらに残されたという類のものである。それらのうちわけの代表的な所在を記してみると、東京大学理学部所蔵本・京都大学国史古文書館所蔵本・東京教育大学図書館所蔵本という公的機関で優遇されてきたものや、伊波普猷所蔵本（後に琉球大学附属図書館内、伊波文庫に収蔵）・東恩納寛惇所蔵本（後に県立図書館内、東恩納文庫に収蔵）・宮良當壮所蔵本・尚家所蔵本（現在、東京都世田谷、松本弘氏管理）・恩河家所蔵本（現在、琉球大学附属図書館収蔵）など、いずれも東京や京都で戦禍をまぬがれた、今となっては貴重な写本であり、他に、久志村（現名護市）字久志所蔵本・宮良殿内所蔵本（八重山石垣市、現在琉球大学附属図書館内、宮良殿内文庫収蔵）・豊川善包所蔵本（本人が東京滞在中に保管していたのを、後に八重山石垣市に持ち帰り保管）・宮古多良間島字仲筋・同字塩川所蔵本・与那国島祖納鳩間家所蔵本・同比川後間家所蔵本などが代表される写本類といえよう。

これらの厳密な書誌的考察はこれからであり、時間をかけて慎重にやらねばならないが、ここに記してないものも含めて、このように保存されているのは、組踊研究の土台をしっかりとさせていくために完璧とはいえないが、喜ぶべき資料であるといえよう。現存組踊写本一覽については、先に拙著『沖縄の祭りと芸能』（昭和五十一年七月、雄山閣出版）の中で、付録としてまとめたが、その後、新資料がいくつか出て来たし、これまでのものにつけ加える写本もあるので、その一覽表の決定版をここであらためてかかってみよう。

二 現存組踊写本一覽

- (1) 今婦仁御殿所蔵本『組踊集』二冊 上巻・下巻 明治廿四年卯十二月 風月軒 沖繩
 県立図書館内、東恩納文庫蔵
 上巻 忠士身替の巻、手水の縁、天願若按 司敵討、雪弘、大川敵討、花売の縁
 下巻 姉妹敵討、執心鐘入、巡見官、本部大主、二山和睦
- (2) 田代安定扣稿本『沖繩組踊集』——即チ沖繩歴史小説集『沖繩小説集』 明治二十年前後筆写
 田代安定扣稿 東京大学理学部人類学教室蔵
 沖繩組踊集 孝女布晒、貞孝婦人、孝行の巻、森川の子、女物狂
 沖繩小説集 探義伝敵討、掣取敵討、大浦敵討
- (3) 田島利三郎自筆本『語学材料』(組踊集)第二 明治二十七年十一月一日 随々菴主 琉球大
 学附属図書館内、伊波文庫蔵
 万歳敵討、義臣物語、孝行ノ巻、北山若按司敵討、巡見官、忠臣身替
- (4) 宮良殿内所蔵本『組躍集』一冊 明治三十年代筆写か 琉球大学附属図書館内、宮良殿内文庫
 蔵

姉妹敵討、多田名大主(残欠)、忠臣反間の巻、中城若松、本部大主(残欠)

- (5) 与那覇政牛所蔵本『組躍集』(一)、(二) (一)は明治二十九年十一月五日編成、(二)は明治二十九年三
 月十五日清書 那覇市首里金城町一—十三番地、与那覇修氏蔵

(一) 忠孝婦人、二山和睦、高山敵討、本部大主

(二) 大南山(残欠)、忠孝夫婦忠義

- (6) 与那国島祖納鳩間家所蔵本『組躍集』四冊 与那国町与那国一〇一番地、鳩間一美氏蔵
 比川後間家所蔵本『組躍集』一冊 与那国町比川、後間正雄氏蔵

鳩間家所蔵

孝女布晒(光緒十五年己丑八月吉祥日—明治二十二年—) 古見や 石戸

北山敵打(光緒十五年己丑十月十日写之本—明治二十二年—)

北山敵討(筆写年代不明) 大野底や仕立物 与那ハ(?)
□□□

忠臣身替(残欠・筆写年代不明)

後間家所蔵

久志之若按司(光緒拾九年癸巳九月吉日—明治二十六年—) 鬚川村 (写本末尾に、師匠・後

間かねとある)

- (7) 多良間島字仲筋所蔵本『組躍集』 二冊

同字塩川所蔵本『組躍集』二冊

仲筋所蔵本

忠臣仲宗根豊見親組、福祿寿の言葉（光緒十五年八月吉日写之—明治二十二年—） 仲筋村

忠孝婦人村原組（本文初めには「大川敵討」とある。筆写年代不明）

塩川所蔵本

忠臣身替（光緒十九年九月吉祥日写—明治二十六年—）

多田名組、さゑきゆんなかれ（筆写年代不明） 塩川村所有

(8) 京都大学国史古文书館本『組躍集（琉球詞曲）』四冊 京都大学国史古文书館所蔵

一冊 雪拂、本部大主（残欠・大清光緒五年己卯三月吉日写ス—明治十二年—） 羽地田井等 東

江にや記

二冊 手水の縁（筆写年代不明）

三冊 忠臣身替（残欠・筆写年代不明）

四冊 久志の若按司（残欠・筆写年代不明）

(9) 宮良當壯所蔵本『組躍集』二冊 東京都世田谷区世田谷一—三五—一六 宮良當章氏蔵

一冊 忠臣身替の巻、二山和睦、姉妹敵討、賢母三遷の巻（筆写年代不明）

二冊 銘刈子（筆写年代不明）

(10) 久志村所蔵本『組躍集』五冊 名護市字久志六九番地 久志公民館蔵

一冊 義臣物語、長寿の大主前、久志の若按司 末尾に、「□子八月 久志村」とか「道光式

拾年」と思われる記録あり。もし道光式拾年だとすれば「庚子」で一八四〇年になる。

二冊 花壳の縁（光緒四戊寅七月吉日—明治十一年—） 久志村

三冊 義臣物語（明治廿四年七月） 久志村二才中

四冊 伏山敵討（明治二十六年七月新求） 久志村二才中有

末尾に、

久志村蔵ん當

二才頭 宮城祐二郎

全 古謝ノ

全 古謝ノ□

全 上比嘉

全 比嘉加那

全 前比嘉

全 比嘉□銅

とある。

- 五冊 波平山戸（筆写年代不明）表に「久志村」、末尾に「二才中」とある。
- (1) 豊川善包所蔵本『組躍集』五冊 石垣市登野城 豊川敏彦氏蔵
- 一冊 八重瀬組躍之粒集（同治六年乙卯三月十九日業之慶応三年） 嘉善氏第一永儀
- 二冊 銘刈子、忠孝婦人（筆写年代不明） 「銘刈子」の末尾に配役・氏名あり。「忠孝婦人」の末尾に、「耕作筆者 登野城筑登之」とある。
- 三冊 高山敵討、孝行口説（道光三十拾年庚戌□□正月十四日大浜親雲上御宅にて開□□□一嘉永三年（一八五〇年））
- 四冊 久志の若按司（辰年二月□□□□写通ひ）
- 五冊 久志の若按司（筆写年代不明）表に「長興氏 豊川善佐筆跡」とある。
- (12) 阿国家所蔵本『組躍集』一冊 与那原町与那原 阿国ツル氏蔵
- 手水の縁（明治十八年） 金武間切並里村 上久保 仲田
- (13) 恩河本『小禄御殿本組躍集』一冊 明治三十一年五月十七日 波上祭ヨリ婦リコレヲ録ス
- 朝祐（写本の末尾には、「大清光緒九年癸未九月吉日写」とある。） 東京在の恩河家から琉大へ寄贈
- 琉球大学附属図書館蔵
- 巡見官、義臣物語、孝行之巻、護佐丸敵討（目次は二童敵討）、執心鐘入、大川敵討、銘刈子（目次は川松之縁）、姉妹敵討、久志之若按司敵討（目次は天願之若按司敵討）、万歳敵討、大城崩、女物
- 狂、忠臣身替之巻、花壳之縁（末尾は森川の子）、東辺名敵討、北山之若按司敵討、二山和睦、孝女布晒、雪払、手水の縁、本部大腹（末尾に連天之若按司敵討）、屋慶名大主敵討、雪払
- (14) 兼島信備所蔵本『組躍集』三冊（上巻・中巻・下巻） 明治三十九年三月 那覇市首里寒川一
- 一六 兼島信英氏蔵
- 上巻 銘刈子、執心鐘入、義臣物語、花壳の縁、萬歳敵討、大城崩、大川敵討
- 中巻 辺土ノ大主、女物狂、孝行ノ巻、巡見官、雪払、本部大主、忠臣身替
- 下巻 姉妹敵討、久志ノ若按司、東辺名夜討、二山和睦、手水の縁、具志川大軍、伏山敵討
- (15) 下地家所蔵本『組躍集』一冊（筆写年代不明） 宜野湾市愛地三七七 下地常子氏蔵
- 北山敵討、忠臣身替の巻
- (16) 具志頭家所蔵本『組躍集』一冊（筆写年代不明） 那覇市首里儀保町一―二一 具志頭朝清氏蔵
- 女物狂、花壳之縁、巡見官、萬歳敵討、義臣物語、久志の若按司（残欠）、姉妹敵討
- (17) 尚家所蔵本『組躍集』一冊 同治六年己卯九月（慶応三年） 東京都世田谷区上北沢五―二二
- 一 二 松本 弘氏蔵
- 執心鐘入、銘刈子、義臣物語、大川敵討、久志の若按司、二山和睦、辺土の大主
- (18) 西親川家所蔵本『組躍集』一冊（筆写年代不明） 勝連村浜 西親川家蔵
- 義臣物語

(19) 東京教育大学本『琉球組躍』一冊 明治廿有八年九月中元求 金武村長門 新垣所有 東京
 教育大学図書館蔵

雪弘、銘刈子、八重瀬、久志之若按司、手水ノ縁

(20) 多良間島石原家所蔵本『組躍集』一冊 道光式拾八年申年八月吉日写 (嘉永元年—一八四八年)

表に「塩川村」とあり、末尾に「峯間上地筑登之」とある。 多良間村塩川四〇二番地 石原春

浩氏蔵

手水の縁

(21) 竹富島仲筋村所蔵本『組躍集』一冊 明治四拾四年拾壹月 中筋之 名壽雲龍 廣瀬南枝

末尾に「廣瀬川初梅南枝寫ス」とある。 竹富町字竹富 生盛康安氏蔵

琉球之史劇父子忠臣之巻

(22) 新本家所蔵本『組躍集』一冊 咸豊九年□之記 (安政六年—一八五九年) 雲茂氏第一 當□石

垣市字大川二〇三番地 新本一成氏蔵

忠孝婦人、八重瀬

(23) 渡名喜島南風原家所蔵本『組躍集』一冊 渡名喜村字西 南風原ヨシ子氏蔵

大川敵討(残欠)

以上の写本類が、今日、各々所蔵しているところで手にとることのできる組踊の資料である。一覽してわかるように、沖縄本島の北部の名護市や中部の宜野湾市、そして那覇市、宮古多良間島、八重山石垣市を中心に与那国島や竹富島、それに東京・京都と、組踊の写本は広範囲の地域に散在しているのが現状で、保管もそれぞれことなっている。

すなわち、公的機関にはいつているのは、その保管状況もきわめて良好で、虫害や破損などという悪条件はないが、民間(個人)や村落でうけついでいるところなどは、しかるべき施設等があるろうはずがなく、簡単な木箱や紙箱におさめられて、防虫剤を入れたりしてなんとか保管されているが、虫害を受けているのがほとんどであり、また、修理などを自己流でやって、写本の損失をひどくしているものもある。中には、毎年行なわれている村踊りに、組踊を指導する師匠をはじめ、各配役の人たちが、手に手にとって荒っぽくめぐり、和紙のため開きにくい場合にはつばをつけてみるという扱い方をしているの、紙質がもろくなり、変質したりして破損や磨滅がひどくなっているものもある。

写本の保管状態は、一部をのぞいてはきわめて悪く、貴重な芸能資料であるこれらの永久保存を考へなければならぬ時期になっているといえよう。その中において、わずかではあるが、その裏打ち修理がはじまっているところがある。多良間村では、村で修理の費用をくみ、人頭税時代の貴重な記録である、『塩川村丑年惣頭帳』や『仲筋村子年惣頭帳』、『塩川村丑年惣頭帳』(残欠本)、『与世山親方規模帳』、『手水の縁』などの完全修理を終えている。それに、この一月に、八月踊りに毎年演じら

れている字仲筋の組踊「忠臣仲宗根豊見親組」「忠孝婦人村原組」と、字塩川の組踊「忠臣身替」「多田名組」の四組が、国の重要無形民俗文化財に指定されたその補助金の中で、約五十万円が計上されて、完全に修理されているのである。自己流の修理法で、のりの使い方がはなはだしかったので、その修理にあたった技師も相当な苦勞をはらわれたときいている。このように、地方自治体や指定された見返りとして、多額の予算を計上して永久保存の体勢がとられるようになってきたので、今後は、徐々にではあるがふえていくことが予想されるのである。

三 与那国島の写本との出会い

与那国島へ組踊調査の目的で出かけたのは、昭和四十四年九月八日頃であった。そこでは村落ごとに組踊の上演がさかんで、それに写本が保存されているからであった。もっともさかんな時は、組踊ムラの東では「大川敵討」「手水の縁」「銘刈子」「花売の縁」「伏山敵討」があり、西では「本部大主」「雪払い」「八重瀬」が毎年交替で演じられていたという。島仲ムラでは「勝連の組」があり、比川ムラでは「久志之若按司」があつて、いわゆる村落ごとに、東・西ごとにその演技を競いあつて、さかんに演じられたのである。それが今日では過疎化の波もあつて、また、生活様式にいちじるしい変化があつて、上演組踊も少なくなっているのが事実で、とくに島仲や比川ではこしばらく演じられ

ていないのである。

一昨年の十月に行なわれた祖納のシティ（節）踊りで組踊「本部大主」を見学した。沖繩本島の村踊りで見るとなまじめさが感じられ、演技も決してひげをとらないほどのできであった。それから想像しても、島がにぎわった頃はもっと力がこもり、そのはりはおしはかることができるほどである。台詞まわし・コスチューム・舞台幕・音楽・小道具などに特徴があつて、村落の遺産として生きつづけている組踊であることを確認した。

島に写本が保存されていることを知ったのは、昭和四十三年の夏に石垣市内や竹宮島を調査して帰ってからで、当時、与那国町教育委員会が社会教育主事としておられた新崎長明氏（現在、与那国小学校教諭）から連絡を受けて心を動かしていたのだが、その後まもなく永積安明氏（当時神戸大学教授、現清泉女子大学教授）が、『文学』（第三十七巻第一号、昭和四十四年一月号）に発表した「沖繩離島の演劇（上）―多良間島の組踊―」（後に、朝日新聞社刊『沖繩離島』昭和四十五年七月十日発行に収録）の中で、与那国島における写本の状況がくわしく紹介されているのを読んで、ぜひ出かけなければと、その年の夏休みに計画を立てて島に渡ったのである。したがって、永積氏の文章は私の興味を大いにそそり、行動をとまなわした貴重な報告であつた。その報告は、次のようになされている。

しかし、先島離島には、いまでも各地に組踊が伝承されており、古い台本で、かろうじて散佚を免れているものがある。たとえば与那国島の祖納には、祖納西組の鳩間一美氏が、やはり美濃判大の

台本「孝女布晒」を蔵しており、その表紙には、「光緒十五年己丑八月吉祥日」「古見や「石戸」と記入されている。「古見や」は屋号で、「石戸」は名、おそらく、この組踊を興行した座元の屋号とその当人の名であろう。(鳩間家もまた現在、祖納西組の組踊座元である)また、おなじ与那国の比川にも、組踊「久志の若按司」が、後間正雄氏に蔵せられており、その台本の表紙にも、「光緒十九年癸巳九月吉日」とある。その他、年代の記されていない台本も、まだいくつが残っているが、その古いものは、およそ、この頃の筆と認められるものが多く、これらによって、明治中期ごろ、先島離島に組踊がさかんにおこなわれていたことが推察されるのである。

与那国島に伝えられている組踊台本には、その他、前記の鳩間家所蔵台本「北山敵討」にも、その表紙の下方に、「大野底や」という屋号が記されており、また、比川の後間家所蔵台本「久志之若按司」には、その裏表紙に「師匠 後間かね」と記されている。

少々長い引用になったが、この部分をみて、その蒐集旅行に出かけたのが大きなきっかけになっているのである。

島では、新崎氏にお願いをして、比川の後間家をたずね、写本を手にすることはできたが、それをゆっくり見ることがむずかしく、その時は一目見ただけで後間家をあとにしたのである。祖納西の鳩間家所蔵のものを、正式に許可を得て借りようとする、少々時間がかかるのではないかと憶測して、私が与那国をはなれる出発時刻直前の空港に、新崎氏がふろしきに大事につつんで届けて下さったの

である。その時の感激は今でも忘れることができない。つつみの中には、「孝女布晒」と「北山敵打」の二冊が大切におさめられていた。新崎氏は手渡しながら、「那覇までもって行って複写したらただちに送り返してくれ」といわれたので、それをぜひ守らなければと思い、那覇にもどると、すぐにコピーセンターに飛び込んでゼロックスで各々二部つくって、一部は原本と一緒に南西航空に頼んで空輸したのである。コピーをした日は昭和四十四年九月十一日で、当時、一枚十セントで四ドル九十七セントを払ったと、メモには記されている。

村落^{ムラ}から正式に持ち出したり、公認をとって撮影しようとするれば、村落の役職を終了した人たちのあつまりである有志常会にかけなければならぬという。そして、全員一致で賛成してくれなければ、なかなかむずかしいという話であった。有志常会を開くのも、今日や明日というふうにはできない上に、そこでの吟味となると、ほとんど不可能に近い答えが出るのではないかと予想されるし、あきらめる以外にないと考えていた。それを鳩間氏と新崎氏の話しあいであずけて下さったのだから、私としてもぜひコピーを余分に一部とって原本と一緒に送らなければと考えたのである。

比川のものについては、その後、二、三度足をほんだが、後間正雄氏が那覇へ出かけて不在であったり、その他都合がつかずに現在におよんだが、今回、文部省から科学研究助成金(国)を受けて、組踊写本の撮影のみの仕事で、昭和五十二年十一月五日に出かけて、二、三日がかりで先にコピーを撮った二冊とともに、「久志之若按司」の撮影にこぎつけることができたのである。それには、与那国

町教育委員会の協力があり、鳩間一美氏や後間正雄氏、その長男後間啓升氏（町役場経済課勤務）のご理解とご配慮があったからである。とくに今回は、町役場の会議室をかしてもらって、そこですべて撮影することができたのは、労を少なくして実績が大きかったのである。

比川の「久志之若按司」は、長年の念願であったので、その蒐集が完了したときの喜びは格別であった。組踊そのものは、沖繩本島や石垣市にも数種の写本があるので、めずらしいものではないが、今後、校合していく上で、ここ与那国島にまでこのようなしつかりした写本が、たしかにあるという事実、その伝播をみていく上できわめて大切だと思っていたからである。今回の案内者、小嶺長夫氏と一緒に鳩間家にうかがった際に、これらの貴重な写本類の保管は、鳩間氏に一任されているとみえて、「那覇までもっていかれて、また送って下さってもいいですよ」と、こころよく言って下さったが、カメラにおさめるべく必要機材一式をもちこんであったので、その好意をこわわって、町役場で見ますからとお借りした中に、先記の二冊の他に、「北山敵討」の写本がほぼ完全な形で見つかり、「忠臣身替」の写本もあることを発見した。

「忠臣身替」は、前と後が欠けており、そのために組踊名がわからずに箱の下の方に収められていたようである。それらを含めた四組を残らずにフィルムにおさめたのである。また、昭和四十四年九月八日と九日に、写本こそなかったが、祖納西に伝わるという「雪払」を書き写してきた。それはペン書きのもので、以前に演じたものを古老たちが思いおこしてまとめたという台本であった。この台本

のあることも新崎氏のご教示によるものであり、わざわざ旅館まで届けて下さり、こちらはそれを写し取るという仕事をこおどりしながら進めたことをおぼえている。「雪払」には内容上二つの型がある。それは、写本一覽の(四)の恩河本『小禄御殿本組躍集』にみえる二つの「雪払」が、そのいい例である。与那国島のもは、今日、よく上演されている伊祖の子と後妻の乙樽、それに姉弟（思鶴と亀千代）、供から成る内容のもので、いわゆる継子いじめの組踊である。その後、昭和四十六年十月に島に渡ったときに、島仲ムラを持ち組踊である「勝連の組」を蒐集した。これもペン書きで、島に住む古典音楽の師匠であられる福里武市氏のノートをかりて書き写した。それは表記のしかたがいたって幼稚で不統一であったので、それを統一してなんとか読めるように、原意をそこなく書きなおして、解説を加えて私の個人誌である『組踊研究』第五号（昭和四十七年四月十五日）に、「資料編(一) 組踊勝連の組」として掲載したのである。福里氏に十数部ほど郵送してその良否をおたずねしたことをおぼえている。ここでは、内容について述べることははぶく。

思うに、この与那国島には、前記五つの写本（孝女布晒・北山敵討・忠臣身替・久志之若按司）の他にも祖納東の持ち芸であった台本が伝えられていたのではないかと推測しているのである。記録等を大切にす島だと聞いているので、きっと由緒ある写本があったと思われるが、戦後このかた消え失せたのではなからうか。また、「孝女布晒」は、光緒十五年とあるから明治二十二年の筆写年代ということになるが、実演をともなったものであったらうかと疑問をいだくのである。島でそれ

その村落の持ち組踊をきいても、この組踊の話はまったく聞かれず、写本のみの存在が強いのである。

この組踊は、沖縄本島でもほとんど舞台にかかったことがない作品だと思われる。明治二十二年といえは、今日の長老の先生方が誕生した前後で、もし那覇や近郊で上演機会があったら記憶に残っておられるであろう。その一人真境名由康氏の話では、たしか一回はあったというのである。創作当時から上演回数のみわめて少ない部類にはいるのかも知れない。写本自体をみても、人たちが使ったと思われる書き込みや手あかなど、まだ、使いすぎによる磨滅がほとんどみられない。しかし、読みがなは他の組踊よりもついている。読むための組踊台本の感じがしてならない。

他にもいくつかの写本があったであろう与那国島に、今日でも五冊の写本が確かに残っているのは、島の豊かさを示すにじゅうぶんな証拠となる。

四 与那国島の写本

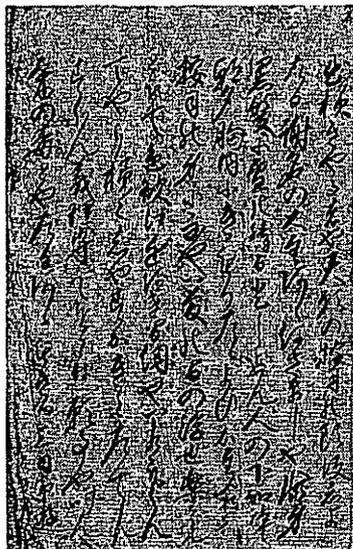
さて、与那国島に現存する写本は、現在のところ五冊であるが、昨年十一月五日から七日までの三日間調査した結果、保管状況は悪いが、どうか大きい破損もなくうけつがれている。比川の後間家所蔵本「久志之若按司」は、持ち運びにビニール袋に入れて、雑誌みたいに二つ折りの強い折りぐ

せをつけてあり、貴重な資料であるがとりあつかい方が気になる携帯のしかたをしていた。こころよくみせていただいて、このようなことをいうのは、礼に反するかも知れぬが、折りぐせなどをつけておくも保存にも影響するのではないか。はじめの二枚は切れており、そこに最近になって和紙を入れて、台詞を書いたのがはっきりわかる一冊である。表紙に、

光緒拾九年癸巳九月吉日

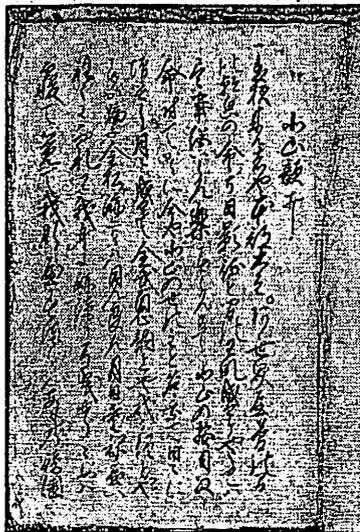
久志之若按司

嶺川村



与那国島比川後間家所蔵本
「久志之若按司」

とあり、末尾には「師匠 後間かね」とある。美濃判大に達筆なお家流で書かれており、縦二十六・三センチ、横十八・七センチで和と同じになっている。本文はタイトルなしですぐ台詞になっている。全二十六枚で一枚の表・裏に各々九行ずつの台詞が記入されている。台本中にはト書きはなく、○印でとなえぎりが示されている。



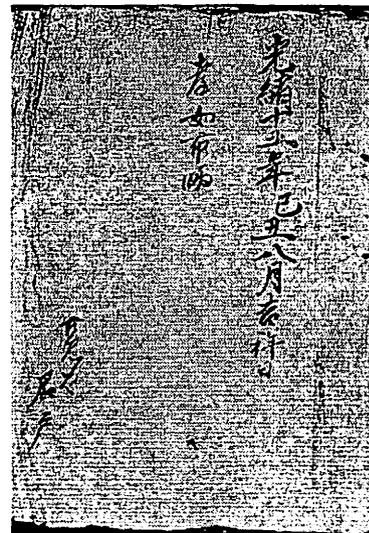
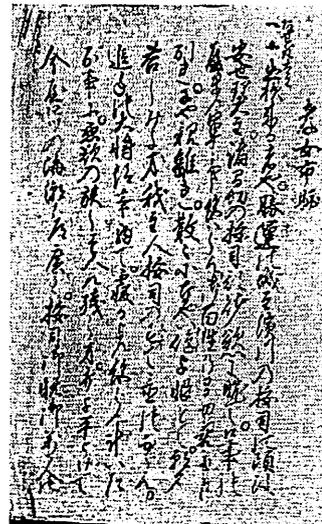
与那国島祖納鳩間家所蔵本「北山敵打」

ページは「孝女布晒」というタイトルが一行とられており、本文は八行になっているが、次からのページは九行で最後まで記録されている。全二十二枚でト書きなどはなく、ごく普通の写本の体裁がとられている。となえぎりのところは、墨もあざやかに○印がほどこされている。同じ組踊の田代扣稿本は、読点に相当する記号がはつきりと記されている。朱の書き入れなどはなく、後の人が鉛筆等でよみがなをつけてある個所が何カ所かみられる。県内に残る貴重な写本であるので、他の写本との校合が待たれる。

「北山敵打」は表紙に、

光緒十五年己丑十月十日写之本

北山敵打



与那国島祖納鳩間家所蔵本「孝女布晒」

祖納西の鳩間家所蔵本には、「孝女布晒」「北山敵打」「北山敵討」「忠臣身替」の三種四冊がある。「孝女布晒」はその表紙に、

光緒十五年己丑八月吉祥日

孝女布晒

古見や

石戸

とあって、やはりお家流の達筆な文字が書きつづられている。この組踊はめずらしいタイトルであり、その写本もここのものと、田代安定扣稿本『沖繩組踊集——即ち沖繩歴史小説集』や恩河本『小椋御殿本組踊集』にはいっているだけである。縦二十六センチ、横十九・五センチで一枚目の表、すなわち最初の

その後にはまったくくない。朱でよみがながつけられており、また、後に青インクでかなをふった箇所もある。

この組踊は、西の持ち芸であったので、シテイ(節)踊りでも何回か上演されたためか、よく使われている。但し、舞台で演ずるときには「本部大主」として呼びならわされて、その名が正式な組踊名であるかのようにいわれてきている。この呼び方は沖繩本島でも同じであり、写本の名前と必ずしも一致していない。むしろ、「北山敵討」という名前で行っているところがほとんどないといえるくらいである。

他の一本「北山敵討」は、表紙に、

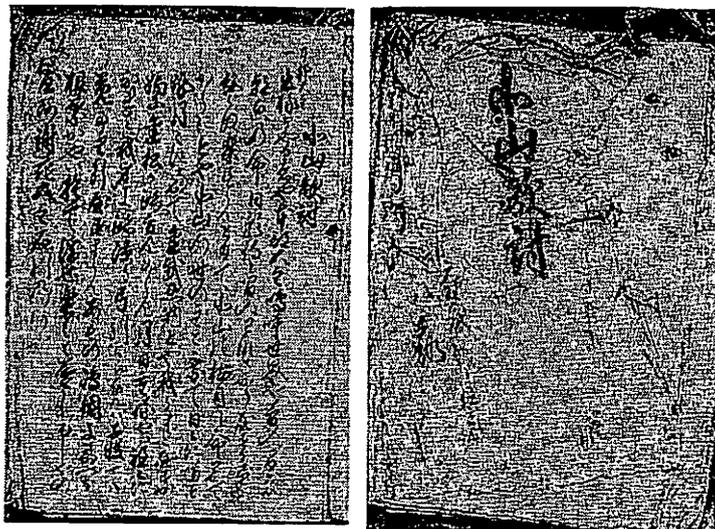
北山敵討

大野底や仕立物

与那(？)
□□□

とあるのみで、筆写年代は記されていない。

これは、昭和四十四年九月に島をおとずれて、那覇まで持ち帰ったときには所持しなかった写本の

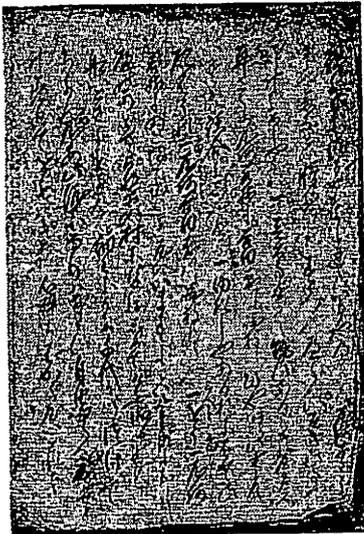


与那国島祖納鳩間家所蔵本「北山敵討」

とあって、所有者が記されていたであろう左下の方が切れおちている。こよりとじになっていて、虫害こそないが、四隅の磨滅が進みつつあり、最後の部分がなく完全ではない。今回、出かけて行ってフィルムにおさめた時には、以前にコピーした時より二、三枚はずれており、保管の状態が思いやられた。「敵打」となっており、別本の「敵討」と表題の一字が違うのである。縦二十六・四センチ、横二十センチで全二十二枚がとじられている。一枚目の表に「北山敵打」というタイトルが一行とられて、そのページは八行から成っており、次からは各々九行書きになっている。となえぎりの記号の○印は、ただ一カ所でそれも一枚目の表の第一行日初句のみで、

一つで、今度はじめて手にとり蒐集したのである。先にしるした永積氏の文章には、はっきり明記されていたのだが、見落していたのである。実際に鳩間家に出かけたわけではなく、新崎氏からうけとったふろしき包みの重さのみを味わったのだから、まだ他に残っているものがあるとは、思いだにできなかったのである。それはこれからのべるあと一組のものも含めてである。新崎氏は二冊とも同名のもので、そのうちの二冊を手早く持って来て下さったと察するのである。

二冊ある「北山敵打(討)」については、後ほど比較してみることにするが、いずれにしても関係深い写本だといえる。縦二十六センチ、横十九センチでこよりとじ。本文は一行がタイトルで、十行ではじまっている。それ以後は各十一行で記されている。全二十二枚で朱のとなえぎりの○印がある。



与那国島祖納鳩間家所蔵本
「忠臣身替」

この写本には必ずらしくト書きに相当する書き入れが二カ所ある。それは、「但此時内江入手燭持出る」(両写本)と「但此時なく」(一本のみ)の記入である。この程度のト書きは、他の写本にもときどきみることができ、そのほとんどは台詞だけの写本である。四冊目の写本「忠臣身替」は、鳩間家へ行って箱の中におさめられている写本類をひら

いてみているうちに、新しく見つけ出した写本であった。はじめの二、三枚と後の部分が散佚して完全ではないが、しかし、大半は残っているので、これからもぜひ保存していかなければならない大切な一本である。前後の台詞と、あったであろう記録等が見当らないので筆写年代はわからないが、紙質や筆跡等からして、おそらく明治二十年代のものと思われる。縦二十六・五センチ、横十九・五センチで十八枚しか残っていない。本文は各々十一行で、朱でとなえぎりの○印がある。西の持ち芸に、「八重瀬」があったということを書前に記したが、おそらく、その台本はこれを使って演じられてきたのであろう。

これまで五冊の現存写本をみたが、筆写年代のはっきりしているのが「光緒十五年」(明治二十二年)で二冊ある。次が「光緒十九年」(明治二十六年)で、組踊写本のもっとも多い年代のグループにはいるものばかりである。後の二組が不明であるのでなんともいえぬが、沖縄で組踊の写本が精力的に筆写されたころの台本が、この与那国島にある経路を通じてはいったと考えられるのである。それでは、与那国島ではその頃から組踊の上演があったのだろうか。島の人たちの話によれば、明治の初年頃から演じられたといわれる。以前には残っていたであろう他の多くの写本類も、おそらく明治二十年代をさかのぼるものはなかったであろうから、島への組踊の伝播は、写本に記された年代とほぼかわらない頃からであろう。

与那国島に伝わる写本の特徴は、とりたてていうものはない。筆写年代といい、台本の書き方の形

式・行数の運び方、となえぎりの朱や墨での○印など、現存する多くの写本と同一形式をふんだものだからである。ただ、表紙や末尾に屋号、例えば「古見や」、「大野底や」という、組踊座元と思われる責任あるところの記名や、「鬮川村」などという村落の記録、「石戸」とか「後間かね」「与那へ(?)」などという人名があつて、村落との結びつきが強いことであろう。屋号や人名(筆写名)がはっきり記録されているのは、そんなに多くはなく、とくに石垣市にあるものや、ここ与那国島にあるのは、その責任や所有の所在をはっきりさせている点では、一つの特徴になるであろう。

ここで、以前に発表したことのある与那国島に伝わる写本類を、「与那国島本『組躍集』」として文字化したのは、やはり当を得た表記ではないことがわかった。そこで、ここで完璧を期す意味で、今後は写本一覽にも明記したように、

与那国島祖納鳩間家所蔵本『組躍集』四冊 (孝女布晒、北山敵討、北山敵討、忠臣身替)

与那国島比川後間家所蔵本『組躍集』一冊 (久志之若按司)

に訂正したい。これまでの表記では、所在地もただ祖納と比川とのみ記していたので、調査するにあたっては不十分な文字化になってしまった感がする。ここで明確にして、史料蒐集家の諸氏の便宜をはかりたい。

五 組踊二つの内容と校合

組踊「孝女布晒」は、今日の与那城村を舞台にくりひろげられる組踊で、したがって地名もいくつか登場する。登場人物の安世理大主の「安世理」は、地名「安勢理」であり、台詞中に「安世理、浜平山(平安山)」の三カ所が二度にわたって出ている。安世理は一六七六年(延宝四)からは、与那城間切であるが、それ以前は勝連間切にはいつていた。東恩納寛惇氏の『南島風土記』には、次のように書かれている。

同年(延宝四年)勝連間切の中から西原・與那城・安勢理・屋慶名・平安座・宮城・伊計・饒辺・やふつの九村を割き名安具・上原の二村を新立して都合十一村を以て初め西原間切を立て與那城王子朝原(尚乘常)等に授けたが、次いで混同を怖れて平田間切と改称し、貞享四年又與那城間切と改めた。現在は饒辺・上原・屋慶名・伊計・與那城・西原・安勢理・宮城・平安座の九字を管し、村衙は屋慶名に在る、那覇より八里。

屋慶名・安勢理などを中心に展開する組踊はこれ一つのみで、地域性のはっきりした組踊といえよう。内容は継子いじめで、継母が夫と先妻の間にできた虎千代と玉松を亡きものとして、実子乙鶴に

夫の出家したあとをつがそうと二人を虐待していく物語で、継母の諸行が城主の浜川按司の耳に入り、呼び出されてきつく問いただされていくのである。

継子いじめの組踊は、他に「巡見官」や「雪払」があるが、父親が出家して仏門にはいった後の家庭騒動という構成はこの作品のみである。表題の「孝女布晒」の「孝女」とは、親孝行の娘の意で、先妻の子「玉松」のことであり、雪の降る日に強行に屋慶名走川で布を晒させるところからの命名であらう。全体のすじを書くとき次の通りである。

勝連の按司の頭役安世理大主は、財慾にふけり、百姓を苦しめている諸間切の按司たちを平定して、安世理・浜・平山（現在の平安座）の地頭職を賜わった。しかし、これからの行末を考えてみると、合戦で多くの人の命をとったので、その人たちの霊をとむらわなければと仏門にはいることを決心し、妻や子に語らずに琉歌一首を書きおき、頭髪を形見に残して山寺に身を隠してしまう。嫡子虎千代は、父の書きおきを見て、母にそのことを告げる。母は、妻や子を残して仏門にはいられるとは情ないという。虎千代は母に、父の行方を尋ねてつれもどしたいことをうちあげ、供をつれて出かける。その後母は、先妻との間にできた虎千代と玉松を追い出して、実子乙鶴に父の領地をつがせようと考え、まず旅に出かけた虎千代を饒辺下庫理を使って殺させる。一方、姉の玉松は、弟虎千代が殺されることを人ずてに聞いて、開夜にまぎれて家を出て、屋慶名浜で花を手向け、水をそなえてお祈りをする。饒辺下庫理は玉松の身を案じて、浜に出かけてそのわけをたずねる。玉松は親や

弟をさがしてすぐにもそこへ行きたくここにいるのだから、どうか一刀のもとに切り殺してほしいと申し出る。饒辺下庫理は母から虎千代を殺すようにいわれたが、これ幸いとばかりお会いして、一部始終を申しあげ、お帰りの際は、私の宿にこられて今後のことは話しあいましょうと約束してあると伝えた。玉松はそのことを聞いて喜び、これからは親がわりになってくれるようにたのむ。

母は玉松と乙鶴を呼んで、虎千代は山盗に出あって死んだことを告げ、今後、父の領地は乙鶴に継がして、今からは姉とも思うな。水や潮をくみ、薪木を取って働いて、台所から上には決してあがるのではないぞときつく言い渡す。乙鶴は姉や兄の親孝行ぶりを強く訴えて、ただ今の話は思いとどまってくれるようにたのむ。母は乙鶴の態度にいきどおり、出ていけととなりつけ、玉松には顔もみたくないので、屋慶名走川で布をさらして来いと命ずる。乙鶴は、無理なことをおっしゃるな、こんな雪の降る日に布をさらすことができませんかとつめよる。玉松は言われた通りに走川に出て布をさらす。母は、乙鶴のことばが気に入らず、乳兄弟の津波のひやを呼んでどうすればよいかを相談する。津波のひやは、姉の玉松がいるので乙鶴もその気にならない、いっそのこと玉松を追い出してしまふことを進言する。悪口をいわれて家を追い出された玉松は、夜中だから今夜だけはとめて下さいと嘆願するが聞き入れられない。途方にくれて饒辺下庫理をたずねていく。雪の中でたおれている玉松に乙鶴はあう。玉松は妹に、母のもとへもどるように言うが、乙鶴は姉をおいては行けぬとがんばる。姉はあまりの寒さのために気を失ってしまう。饒辺下庫理は玉松と乙鶴をさが

しに出かける。雪の中にいる二人に出会い、わが宿に案内する。一方、虎千代は崎浜の子とともに、饒辺下庫理の宿に行つて、父の後継ぎのことを考えてもらおうと出かける。父は大宜味塩屋村の東の遠山寺にはいられて、御仏の道に深くお仕えして、修行をつんでおられるので、お連れすることができなかったことを饒辺下庫理に伝える。こうなつてはしかたがないので、後継ぎを考えることを申しあわせる。

浜川按司の頭役屋慶名大主は、阿世理大主妻乙樽が、実子の乙鶴を立てて父の後を継がそうと、先妻との子虎千代と玉松を虐待して追い出したことを聞いて、糺明座にひき出してただしてやらねばと、浜川按司の命をうけて引き立てに行く。大主の供によってなわをうたれ、つれて行かれる。虎千代は饒辺下庫理に勝連につれていってくれるようにたのむ。浜川按司のもとに懇願する。姉弟二人の心からしてくれるようをお願いする。姉の玉松も母をゆるしてくださいるように懇願する。姉弟二人の心からの願ひ事に、さすがの按司もすっかりほだされて、二人こそ神仏のような人だとたえる。浜川按司は、母の乙樽の諸行をきつくだすとともに、こんこんとさとす。さすがの乙樽もこれまでのことを深く反省して、乙鶴とともにわけへだてなくかわいがることを約束する。按司はむつまじく暮らすことを申しつけ、饒辺下庫理に不和にでもなつたらすぐに知らせるようにつける。また、阿世(勢)理・浜・平安山(平安座)の地頭職を虎千代に与え、まじめに仕事にうちこむことを命ずる。虎千代はその言葉を身にあまる光栄だと感謝して、親子手をととりあつてわが家へもどる。

長い筋書きになったが、現存組踊の中で、数少ない継子いじめの物語である。先に記した「巡見官」や「雪払」とどのようなかわりがあるのかわしく追究していないが、やはり、継母(後妻)が先妻の子をいじめること、雪の降らぬ沖繩で雪降りの場を設定してあること、子どもたちの強い訴え(親孝行)で母がゆるされ、また、心に深くうたれて改心していくことなどを考えると、中でも「雪払」と非常によく似ている。同じ継子いじめでも、「巡見官」のみがやや異質ではあるが、二つは何らかの形で影響関係があるのでないかと思われる。

真境名由康氏の話によると、「孝女布晒」は、真境名氏が十四、五歳(明治三十五、六年頃)に那覇の端道にあった芝居劇場(本演劇場―下の芝居―)で演じられただけで、その後今日に至るまで、舞台にかかったことはないという。真境名氏は出演したことはないが、宮里さんという三歳ほど年上の役者が出たことをおぼえていると話して下さった。組踊としてはあまり客受けがよくなく、そのためもあつたらうし、台本がまもなく失せて得られなかったことも関係しているらしい。なお、この写本と東京大学理学部人類学教室に保管されている写本や琉球大学附属図書館蔵本との比較や校合の作業は、稿をあらためてやることを約束しておきたい。

二冊の「北山敵打(討)」があるが、この組踊は別名「本部大主」として、沖繩本島北部の名護市、宜野座村を中心に、中部の読谷村をはじめ、最西南端はこの与那国島まで、多くの村落の村踊りでよく演じられており、観客の拍手かっ采をうける作品である。現存する写本としては与那国島の二冊の

他に、①今帰仁御殿所蔵本『組躍集』下巻、②宮良殿内所蔵本『組躍集』(一)、③与那覇政牛所蔵本『組躍集』(一)、④京都大学国史古文書館本『組躍集』一冊、⑤恩河本『小祿御殿本組躍集』一冊、⑥兼島信備所蔵本『組躍集』中巻、⑦下地家所蔵本『組躍集』一冊の九冊があり、写本の健在さを誇っている一つである。「敵打」は明治二十二年の写本になっており、別本「敵討」は年代こそ不明だが、やはり古い写本の一つであろう。物語のすじは次の通りである。

本部大主は、夢の間の浮世を楽しくすごそうと思つて、北山の按司を亡ぼして按司の地位につき、何不自由なく日々を送っているが、北山の按司の嫡子金松が逃げ失せていないので、それが気がかりで心が休まらない。あらゆる手段をこらうじて島国をさがし、若按司を亡き者にしようと考えて、臣下の謝花大主と石川のひやの二人に殺すように命ずる。あわせてもしかまっています者がいたら、親類縁者にいたるまで責めのある限りをあたえるという高札をたてさせる。

金松は火責めの城の中を母と妹をひきつれてのがれたが、母は逃げる途中敵の流れ矢にあたって亡くなる。妹の思鶴と二人は逃げのびることができたので、臣下の謝名大主が国頭に出かけていることを聞いて、それをたよっていく。幼ない思鶴は母が亡くなったことも知らずに、国頭に行ったらあうことができるのかと兄にきく。二人は手を取りあつてなれない山道を逃げのびるが、疲れ果ててしまいその場にすわりこんでしまう。一方、謝名大主は主君の悲惨な最期をきいて、怒りがこみあげてくるが、若按司が逃げのびていることを聞いて、その行方をさがして時節を待つて敵を討と

うと決心する。謝名と里村親子は一緒に先を急ぐ途中、男子の苦しむ声を聞いてかけよると若按司に出あう。邂逅を互に喜びあい、妹の思鶴をさがして時節まで身を隠すことになる。謝名は、国頭の頭かしら。奥間大主は忠節な人だから、たずねていつて時節を待ちましようといひ、四人で出かける。途中、日が暮れたので一夜の宿を乞うたところは、今は亡き臣下岸本大主の嫡子虎千代母子の住む家であった。虎千代は高札に北山の按司の身内のものは、皆殺しにするとあつたので、母親と一緒にこの山に身を隠して好機を待つていたと話す。母は若按司や謝名大主たちをころよく迎えて再会を喜びあう。その山へ猪狩りを職とする加那筑が、九ヶ間切一だと自慢する犬をつれて登つてきて、虎千代に用件を伝えるのである。それは北山の按司の根を絶やそうと、謝花大主は多くの部下をひきつれて番所に来ている。そして猪をとつて来いと強引に命じたので、ことわることができずに、こんな雪の降る日ではあるがしかたなくやつて来たという。虎千代は加那筑の知らせに礼をいい、すぐに皆に報告する。虎千代はつづいて謝花の一行は、明日にでも山狩りに来るはずだから、若按司の身替りになつて討死をすれば、手柄をあげたと思つて誇つて今帰仁にもどるにちがいない。このことを急いできめてくれとたのむ。若按司は罪なき者を敵にわたすことはできないときき入れない。虎千代は身替りに立つてぜひお役に立ちたいとつめよる。一方、里村も虎千代と二人で敵方ののりこむことを強く訴える。若按司がなかなか聞き入れないので、虎千代は決死の覚悟のほどを刀のつかに手をかけて示す。謝名は身をきりさこうとする虎千代の主人思いの強固さを目のあたりに

みて、若按司にこの二人を出してやるようにたのむ。二人はゆるされて大宜味番所に出かけることになる。その時、番所に火をつけて若按司をめしとってきたことをつければ、村々にまわした追手も呼びもどして心をゆるすであろうと話しあう。二人は計画どおり謝花大主にとらわれて本部の前につき出され、牢にぶちこまれる。本部はいたく喜んで、謝花に領地まで与えると約束する。そして、明日はお祝いをするので、その準備にとりかかるようにいいわたす。村々にやってあった追手を急いでもどさせた。謝名大主は敵を討つ好機到来だといって、若按司にその手配をさせる。謝名は来る十四日に勘手納の浜に二人をひき出して処刑するはずだから、皆で一丸となつてとりかかるように士気を鼓舞する。謝花大主はそのようなことも知らずに勘手納に出かけていき、二人を殺させようとしている。そこへ森川が名乗り出て切りあいになり、謝花はとらえられ、本部も伏勢のためにとりおさえられる。若按司を先頭に旧北山の按司の臣下が喜び、ほこらしげに元の御城へと帰る。

この組踊の写本は、前述したように数においては多い方で、まだ未発見のものなどもある可能性が考えられるのである。そのことについてはこれからも持続して調査していく予定にしている。また、村踊りでなぜ好まれて演じられているのかと考えてみたりしている。上演時間にして約二時間もかかるものを、共同体の構成員が目を輝して見入るといふ魅力は、いったいどこにあるのだろうか。

全体の構成を考えてみると、①悪臣本部大主の出演、今をときめく台詞をのべる。逃亡した北山按司方の根絶を厳命。②若按司・妹の出演、道行。③山道における若按司と部下の謝名大主と里村親子との邂逅・妹の発見。④旧臣岸本大主の嫡子虎千代母子とのめぐりあい。⑤虎千代は若按司の身替りに立つ。⑥番所へのつけ火、虎千代と里村捕虜となる。⑦敵討ち、お家再興。という形になっている。全体をみると変化にとんで飽きを感じさせない流れになっているが、こういう強・弱、動・静のくみあわせあたりにその真意があるのかも知れぬ。とくに若按司(金松)とその妹(思鶴)の出演とそのとりかわす台詞は、見るもの聞くものの涙をさそう場である。兄妹愛をひしひしと強調するところといえよう。また、身替りに立つ場で、若按司と虎千代のやりとり、それに加えて里村と謝名大主のかかわり方に主君への思いやりが徹底的に表現され、それを決行しようと男の意地を大刀に象徴させてあるあたり、これまた観るものの共感を呼ぶところがある。

村踊りの世界では、舞台に登場する人物をわが身におきかえて見守り、感情表現をしていくので、時のたつのを忘れさせる不思議な雰囲気を持っているのである。このあたりに村踊りで歓迎されるいわれがあるように思われる。

さて、二冊ある「北山敵打(討)」の比較をしていきたい。もちろん、話のすじについては、同じ題名どおりまったく同じであるが、台詞に出入りがあったり、配役名の入れ違い、誤表記、語の異動等が多くみられるので、その方面を特にとりあげたい。

光緒十五年己丑十月十日亨之本

(なし)

(なし)

はな盛りやれハ
世の主と名乗て
日々に増そし
跡方ん目ん良ん
弓曳ゆら

(なし)

石川波のひや

供兩人

本部

謝花

(なし)

引はらうし

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

追打の

子持ふし

なれ山道

あての妹列て

やしまあえい

肝も気も

わん胞い

日本團ノと

こま迄や行か

此妹抱い

急ちいすからん

捕らゝすゆへや

猶い身になれハ

打取らやい

おきか

心闇暗に

千瀬ふし

生別れそか心気

東江ふし

おなざらと御子

御行来のなんてやり

(なし)

大野底や仕立物

口口与那ハ?

はなさかりやすか

世の主と乗て

日々に増す勢

跡方んめらん

弓引ら

同人

石川のひや

謝花大主石川のひや

本部大主

謝花大主

本部大主

ひきはらをち

行わんしゆも

謝花大主

一拝留やへて

謝花大主

一拝留やへて

同人言葉

のき打の

哥子持ふし

ならん山道

あてなしの妹列て

やすましやい

肝んきも

わぬたちやひ

目元ころノと

こままでやちやすか

此妹たちや

急ちいすからぬ

鋸めらるゆへや

ひちゆひ身になれば

討とやへ

おいけり

心くら開と

哥七尺ふし

生別れするか

哥東江ふし

をなちやらと思子

御行来のなゆんでやり

不儀事たいもの
おなぎやと御子
御行来のないらんてやり
北山の御軍

(なし)

流り失

時節待ひらに

(なし)

あき七尺ふし

大主よとまで

是非なひと

時節待ひるに

里村

虎千代

首里からとやすか

(なし)

謝名

行る道たもの

こゝりてと居たる

(なし)

(なし)

ふしぎごとたいもの
をなちやらと思子
御行来のないらんてやり
北山の御軍

若按司

流矢

時節待へら

謝名の大王

若按司

哥七尺ふし

大主よとまで

慈悲な人

時節待ちやへらに

(なし)

虎千代内□で言葉

首里からとやすか

虎千代

同人

いきゆる道ちたいもの

こゝりてとおよる

同人

虎千代

打取らんともて
存命て居たん
思子とやいめしる
同人母言葉

ふふちきてるふふき

御是非御情けの

(なし)

御慈悲有る

かたこそら

似ち居よい興所に

(なし)

御元祖の光り

(なし)

別の分別

打烈て此事や

立横に切へ

同人

(なし)

ねちゆる

計へあやへもの
智高ないん
たゝかよる積い

討捕らんともて
ならへておやへたん
思子とやいめしやいる
虎千代母

はうちきてるはうちき

御慈悲御情の

但此時なく

御慈有ん

かたくつち

ちゆひよるに

虎千代

御家御元祖の光

里村

手段分別

打列此間や

立横に切やへ

謝名の大王

同人

似ちゆる

謀あやへもの
知は高ないん
たゝかよる様

おの時に北山の按司ニ
 知なすにゆめ
 母ひちゆへ
 いちやひもの
 饒波ふし
 義理立と武人
 百勇みいさめて
 (なし)
 供言葉
 いちる働に
 生捕ひちやあへたん
 (なし)
 助ひん居らん
 たちひやしやすか
 分さひん知らん
 供兩人
 同人
 たちやうりく
 はな並ひないん
 急ち引返す
 虎千代と里村や思子身替に打死と思ひ究めやいおた
 す天の御助か殺さしやすんにやた

おの時北山の若按司に
 しらなしによめ
 母一人
 いきやへもの
 哥伊野波ふし
 義理やてとふたい
 百勇いさて
 同人
 供
 いきやる働に
 生とやへちやへたる
 里村
 助へむをらん
 たかひやしやすか
 分さいむ知らぬ
 供
 (なし)
 (なし)
 ならひないん
 急ち引とらす
 (なし)

謝名大主
 やあ思子く
 拜留やへて
 同人
 御みよかり
 耳鼻もすふい落ち
 十指切やい
 (なし)
 勘手納に待請て居とて
 (なし)
 森川志慶真兩人
 岩を掻かすて
 一刀に首よはねり
 渡真理ひや
 こんしてからに
 惣人数
 拜留やひて

(なし)
 (なし)
 おう
 謝名大主
 おんにゆかれ
 耳鼻んそぎ落ち
 (なし)
 同人
 勘手納の浜に待受けてをとて
 □言や過言
 兩人
 岩を掻すりて
 一方から首をはねれ
 渡真理
 こんしめてからに
 (なし)
 (なし)

大まかな校合をしたのだが、このように両者には、台詞の異動や配役の出入り、誤表記、節名のちがいが、欠落部分、仮名遣いの不統一等があつて、おそらく同一系統であるはずの写本だと思われるが、そのちがいがこんなにもみられるのである。ここにとりあげなかつた仮名遣いの問題としては、たと

えば、「さ」「へ」「ひ」の使ひ方、「さ」「り」「む」「ん」「よ」「ゆ」「き」「ち」「ぬ」「ん」等で、不統一がもっとも目立ち、その数も多い。

現存する写本には、このような異動は普通であり、どうしてこのようになったかについては、まだ究められていない。厳密な校合は、後日、底本をきめてやっていくつもりだが、その底本をきめるのが一苦労である。

組踊は元来、口承的性格が強く、師匠から弟子(後継者)へ口うつしに指導がなされたので、文字化された台本などは、あくまでも二次的で、備忘録的存在であったのだろう。その結果、正確に記録して残すという方法は、さほど重要でなかったのかも知れぬ。気になるのは、習い上げた台詞を文字で残すのに、このように思い思いに書かれたのかということである。また、元本もとがあつて、それを写す作業があつただろうと思われるが、作業の段階で表記に差が生じ、挿入や削除がなされ、一部分略する方法がとられたのだろうか。琉歌集やその他の写本類があるが、それらの異動は組踊ほどではない。組踊の台詞は、舞台でと覚えて一つの物語を完成して、見る人に感動を与えていくものであるのだらうか。組踊写本のいちじるしい異動は、そこらあたりに根があるように思われてならない。節名の異動もある。これもその時の地謡をつとめる人が、場面の効果をねらつて、曲を入れかえることがあつたと聞いているが、そういうものの具体的な例であらうか。このように組踊写本の比較や校合

には、限界があるように思われてならない。底本決定の方法も具体策はなく、伊波普猷氏の『戯曲集』におさめられている十一組の台本は、完璧とはいえないが、それを底本の目安として考えられている人もいるのである。

六 おわりに

これまで与那国島に存する組踊の写本についてのべて来たが、紙数も予定をはるかにこしているの
で、簡潔にまとめておくことにしたい。

与那国島には、多くの組踊が伝わっており、それらが村落むらごとのシテイ(節)踊りの中で、長い年月にわたつて演じられてきているが、その中の五組が写本として残っており、今日では島に残る貴重な唯一の芸能資料になっている。現在では五冊だけしかみあたらないが、以前にはもっと他の組踊写本がきつとあつたにちがいない。昭和四十一年に「大川敵討」を石垣市までもつていって、市内の丸映館で上演して大好評をほくしたとも聞いている。与那国島は昔から組踊を大切に、熱心に育んできた数少ない島の一つといえよう。きつと豊かな土壌と人情あつき人々の生活する、すばらしい風土であつたにちがいない。

この島にどのような数多くの組踊が伝播し、定着したのであろうか。このことは与那国島のみ

に問われるものではなく、宮古の多良間島にもそっくりあてはまる問題である。現存する写本は、おそらく沖縄本島からそのもと本ともなるべきものが、何者かによって持ちこまれ、そこで筆写されたものと思われる。あるいは、表記に明記されている、「古見や 石戸」とか「大野底や仕立物 与那ハ(?)」「師匠 後間かね」とあるように、本文はすでに筆写されたものがあって、それに屋号とか人名が書き加えられたものであるかも知れぬ。いずれにしても、明治以前に首里からの役人が持ってきたとは考えられない。明治初年から十年代にかけて、島に輸入されたものであろう。僻遠の地にいかにしてはいつて来たのかについては、はっきりしていない。今後は、組踊の伝播がどのようにしてなされたかということに重点をおいて、可能な限りの考察をしていきたい。